

# 方向

第八七号 一九八八年八月二〇日 京都市上京区下長者町通千本西入妙徳寺内 方向 社

さくらんぼ

1988.6.9.

原田 慶

カッタ 原田道子

「さあみんな行くぞ、今日はさくらんぼをとるんだ」

「だってタコさん、あのお城には鬼がいるっていうよ」

「そうだ、目がつり上がってぎらぎら光り、四角い顔をした赤鬼がいるさ。おまけにその母鬼がおっかない、お代官のようにきゅっとまげを結い上げて、黒い着物に無地の帯、やっぱりつり上がった目に口は一字、いつも床の間の部屋にきちんと座ってにらんでいるんだ。鬼の嫁さんはやせた小女で、鼻とんがらかして口への字に曲げて、いつだって忙しく歩きまわっている」

そこでタコは急に表情をやわらげて続ける。

「でもさ、お姫さまはちがうぞ、背が高く長い髪をさらさらさせてさ、とつてもやさしいんだ。池の鯉に餌をやったり、庭の通りにラッパスイセンをまっすぐ一列に並ばせたり、池のまわりの砂に、マツバボタンをいっぱい敷きつめたりしているぜ」

「ふうんタコさんは何だつてよく知っているんだ」

小さい子どもたちは、タコの言うことに感心して、素直に目を輝かせる。

「そつとそつと、みんな小さくなって歩け、足音をたてるな。ガラス窓の下はよつんばいになって行くんだ、

ひろい部屋の中をのぞくんじやないぞ、時々鬼が会議をしていたりするんだから」

子どもたちは真剣な顔つきで、さくらんぼの大木を目あてに忍んで行く。大きく枝を広げたさくらんぼの木はちょうど実の成り頃の年令だろうか、びっしりと赤いつやつやの実をつけている。大きい者から順にたかく登っ

た子どもたちは、夢中でもいでポケットにねじ込んだ。その気配に気づいたのだから、一ばん近くの会議室のガラス窓ががらっと開いた。

「逃げろ、鬼だ」

いたずら猿の群れのように子どもたちは木から滑り下りると、門に向かって走った。

その中に一人、木登りも

できないほど幼い子どもがまぎれ込んでいた。そのチビは木の下に立っていたのだが逃げおくれで、後からみんなについて走った。



川原の石垣まで逃げて、みんなタコのまわりに集まると、ポケットのさくらんぼを出した。大水を防ぐために石をコンクリートで固めた堤防は、通り道ではないから大人はめつたにやって来ない。ところどころ石のすき間から、イタドリが赤い茎を伸ばしている。

タコもいれて十三人、みんなに同じだけさくらんぼを分けてやると、今日の仕事はこれまで、子どもたちは思のおもいに散っていった。さつきから遠くに立って、この様子を見ていたチビのことを知っていたタコは、自分のさくらんぼをそっくりチビにくれてやって、黙って立ち去った。

こんなにしてタコはいつも、ボス猿のように群れを引きつれて、時には隣村まで遠征したりしていたのだ。しかしその頃、ほんものの戦争が激しくなると、村の男たちはだんだんと、年いった者まで兵隊にとられて行った。女や子どもたちは毎日、駅まで出て見送った。子どもが、学校でもらって来た長四角の紙にクレヨンで赤い丸を描いて、しのべ竹に張りつけた日のまるの旗は、破れてまたまき込んで張りつけて、だんだん小さくなっていく。そのうちにととうタコにも兵隊の召集令状が来た。あんながき大将も兵隊にとられる年令だったんだらうかと、村ではみんなびっくりしたが、女の子までが、「ぼくは軍人だいすきさ、今に大きくなったならくしょうつけて剣さげて」などとうたっていたのだから、タコは勇んで出かけて行った。

それから三か月ほどたった頃、タコが兵隊を逃げ出したというので、村にも憲兵がさがしにきた。村へ逃げて来たんだらうかと、みんなひそひそ話したりしていたが、ほんとうはタコのことをかわいそうだと思っている人もたくさんいたのだ。「だってタコはまだ子どもだよ」などと大きな声ではいえない。憲兵たちはお城にいて、

夜も遅くまで会議室からうすい光がもれていた。タコが見つかつたのかどうか、しばらくして憲兵はみんな村から引き揚げていった。村には年寄りと女と子どもばかり、戦争がどうなつたのかわからないが、子どもたちは、学校で行進などの訓練ばかり、女たちは飛行機の油をとるために、松の根を掘りにでたりしていた。みんなが疲れはてたころ、やっと戦争が終わつた。ぼろぼろになつた兵隊が少しづつ帰つてきたけれど、いつになつてもタコは帰つてこなかつた。逃げてどこかへ行つたのか、捕まつてどうかしたのか、戦死したのか、もう気づかう者もいなかった。

戦争に負けてしばらくすると、赤い屋根のお城は取り壊されて、鬼の一家はどこかへ行き、後に小さな家がいくつも建つた。さくらんぼの大木も切り倒されて、村はすっかり様子が変わつてしまつた。

すぎたことはみんな煙のように消えて、夢みたいな気がしたけれど、あの時のチビは憶えていたのだ。

「タコさんはもう帰つてこないよね。さくらんぼの木はなくなつたし、お姫さまは鬼がどこかへ連れて行つたから、もうスイセンもマツバボタンも咲いてないもの。だけど一つだけ残念なことがあるんだ。あの時におれが今くらい大きくなつていたら、木に登つてさくらんぼをもぐことができたんだ。そうすればタコさんもさくらんぼが食べられたのに。あの時タコさんはさくらんぼをみんなおれにくれて、自分じゃ一つもとらないで兵隊に行つてしまつたらう。おれ、ずっとタコさんのこと、わすれないよ」

ところであの青年のことを、どうしてタコと呼んでいたのか、そのわけを憶えている人はいないだろうか。

王人

女

1988.7.7

原田 慶

それは、わたしが小学校の三年生のころのことでした。

青々と稲の茂った田んぼのなかの馬車道を、赤い振り袖をひらひらさせて、女の人が行くのが見える。わたしは家の庭に立っていた。

いつか、芝居小屋で見た八百屋お七みたいだねえ、とおもっていたが、誰だろうあの人は。

「かわいそうにねえ、サワちゃんはどうとう気が狂ったらしいよ。でも仕方がないね相手に嫁さんがあったっていうんだから、いくら好きだっていってもどうにもならないよ」

「その巡査さんは言わなかったのかい、嫁さんがいるってことを、サワちゃんにさ」

「巡査さんは、サワちゃんのことを何も知らなかったっていうよ。自分だってもらったばかりの嫁さんと、母さんを家において、ここの駐在所へ来たんだって」

「じゃあサワちゃんは、ひとりで巡査さんのことを想っていたんだね。嫁さんのある人を好きになるなんて、運がわるかったね」

「急に巡査さんがどこかへ転動させられて行ったんだってさ。誰かが警察へなにか言ったんだらう」

「サワちゃんにはよっぽどのことだったんだ、若い人は思いつめるからねえ」

赤い振り袖の人は、サワちゃんという人らしい。あんなに美しい人が村にいたなんて知らなかった。

サワちゃんはふわっと夢の中を歩く人のように、馬車道を行って見えなくなった。そういえば、まえに巡査さんのことも聞いたような気がする。村の人が噂していたのかもしれない。

それからしばらくたって、夏の終わり頃、わたしは一人で秘密の場所へ出かけて行つた。そこは川原の中洲で、たまにしか水が来ないから、松の木がひよろひよろと伸びて、まばらな林になっている。その根もとには瘦せたススキやツキミソウが生え、うすいピンクのカワラナデシコガ、あちこちに花を咲かせる。

この季節になると、きまってわたしは妹や弟をさそわずに、そつと一人で行くことにしていた。馬車道を途中で右にそれて、田の中の細い道を下って行き、沼地を越えて、ちよつとした流れを渡って中洲にはいる。その沼地が、ほんとうは少し恐い。モジズリ草がかすかなピンクで揺れていて、ばちんとはじけた小さな星のような、ニワゼキショウが、一面に咲いているのは柔しいが、時々蛇がのんびり寝そべっているのに出会うと、心臓がとび出しそうになる。音のしそうな胸をおさえて、しのび足で中洲にたどりつく。

そこはいつでも人がいない、しんとして、わたしは天地にただ一人という、不思議な気持ちになって松林を歩く。

白い浜辺の松原に

波が寄せたり返したり

海は知らないが、学校で教わった歌と羽衣の話の思い出す。

一人の漁師が三保の松原を歩いておりますと、どこからか何ともいえない、よい香りがただよってきました。漁師があたりを見まわしますと、松の枝に美しい布が掛かっている、風に揺れています。よい香りはそこから流れてくるのです。漁師はおもわず近寄ってその布を手に取り眺めておりました。すると、そこへ一人の美しい女の人が来て、漁師に言いました。

「どうかその布を、わたしにお返しください」

「いいえ、これはわたしが見つけたのだから、わたしの物です。返すわけにはいきません」

「それは天人の羽衣といって、あなた方にはようない物です。どうか返してくださいお願いします。それがないと、わたしは天に帰ることができません」

「それはお気のどくだ、では返してあげましょう。その代り、わたしに天女の舞を見せてください」

「ありがとうございます、お札に舞ってお見せしましょう」

あまの羽衣ひらひらと

天女の舞の美しさ

漁師がうっとり見とれているうちに、天女はだんだん高くなり、天へ帰って行きました。

かもめすいすい飛んでゆく

そらにほんのり富士の山

心の中でうたいながら、ナデシコの花をみつめて歩く。声を出すとこの世界が消えて、夢が醒めてしまいそうなくらい静かだし、どこかに天女がかくれているような気さえする。

その時バサッと音がしてカラスが飛び立った。びっくりして木の蔭にしゃがんでのぞいていると、赤い振り袖の人が見えた。

サワちゃんだ、見つかったらどうしよう。わたしは動けなくなって、心臓がごとんごとん鳴り出した。サワちゃんは、わたしに気づかないで、長い袖をひらひら振って舞うようになっている。もし川の方へいったらどうしよう、みずは深くないが流れが速い、すこし川下に行くとき大きく曲がっていて、その崖下が淵になって渦が巻いている。そこに巻き込まれたら浮かんで来ないのだ。どういう女の人たちだか、産まれたばかりの赤ん坊を投げ捨てるか聞いている。

その時わたしは、はっと思ひ出してとびあがった。今日は上の発電所で水を流すから、中洲へ行くんじゃないとおじいさんに言われていたのだ。わたしは夢中で走った。もう蛇なんか踏んづけたって知らない、沼を走って、馬車道を走って、家に着くとわあっと泣き出した。「どうした」おじいさんが一人で家について驚いている

「サワちゃんが」



「サワちゃんがどうした」

「中洲の松原にいる」

「そりゃあ大変だ、おまえも松原へ行ったのか、今日は水がくるから行くなって言ったろう。もう水がきてる頃だ、おまえは家にいろ、じいちゃんが見てくるから」

水かさはもう増えていて、中洲を越して激しく流れていた。村の人が出てさがしたが、サワちゃんは見つからない。渦に巻き込まれてしまったのだろうか。日が暮れて仕方なく村の人たちは引きあげた。

翌朝はやく川下の村から、赤い着物の人が流されてきたと知らせがあった。サワちゃんは、あの岩だらけの川を、赤い振り袖を着てどんなにして流れて行ったのだろうか。わたしはサワちゃんがかわいそうで仕方がなかった。

その後、水のひいた松原へ、おじいさんはわたしを連れて行ってくれた。流れの下で松の根にしがみついていたススキやそれに助けられたナデシコが、やっと起き上がって風に揺れていた。

「おじいさん、サワちゃんは天女みたいに、松原で舞っていたんだよ」

「そうか、天に昇りそこなった天女だな」

「でももう天に帰って、お星さまになってるね」

「そうだ、人のからだは天からもらった物だからな、お返ししたらみんなお星さまになるんだ。もう気にすんな、サワちゃんはきつと天に帰ってるさ」

「うん」

わたしの心の中では、もう何十年も昔、子どもの頃に見た赤い振り袖のひとが、今でも舞っているのです。わたしはその日以来、中洲の松原へは行きませんでした。

今ではその辺りの川岸はブロックで固められ、きれいに整備されて、沼地や中洲は跡形もなくなってしまいました。

## 好事

近

— 李清照 (四五) —

1988. 7. 31.

原田憲雄

風定落花深、

風おちて散る花ふかし

簾外擁紅堆雪。

簾の外に寄する紅、積む雪

長記海棠開後、

つねにおもふ、海棠の咲きたる後は

正傷春時節。

春を傷む時なることを

酒闌歌罷玉尊空、

酒尽き 歌やみ ほとぎ空しく

青缸暗滅。

青きともしび、てりかげり

魂夢不堪幽怨，

魂たまあくがれて さぶしきに

更一声啼歎。

さらに一声 ほととぎす

「好事近」は、双調、四十五字、前後段おのおの四句、兩仄韻。「詞譜」卷五に宋祁の「睡起玉屏風，吹去亂紅猶落。天氣驟生輕暖，襯沈香帷箔。珠簾約住海棠風，愁挖兩眉角。昨夜一庭明月，冷秋千紅索。」をこの調の正体とする。李清照は、宋氏の作から、調だけでなく、ことばも学んでいるのであろう。

風おちて散る花ふかし

は、とりたてて何ということもないようでありながら味わいのふかい句である。とりたてて何ということもないようだが、何ということもないのではない。おそらく「南史」「陳書」の語る謝貞の詩句を本歌とする。謝貞はおさなときから聰慧であった。八歳で「春日閑居」と題する詩を作った。母方のいとこ伯父が感心していった。「この子は大成するだろう」「風定花猶落」風おちて花なほ散りぬ、は大詩人謝惠連の詩に追いつくほどのものだ。南北朝末の乱世に流浪し、兵亂にあい作品はほとんど残らぬ。そんなところも李清照の心をとらえたのかもしれない。李清照の句は、本歌を知らなくても、そのまま味わいうるが、本歌を知れば、作者にふり積もった齡のむだでなかったことが察せられる。

簾の外に寄する紅 積む雪

といつても「積む雪」堆雪は、雪そのものではなく、散って庭にうずだかい白い花で、「寄する紅」擁紅、すなわち吹き寄せられた紅い花に対する。もっとも唐の詩人鄭谷の「峽中」に「春は寒し堆雪の樓」の句、そのあと

に「往事は今日の如し」というから、堆雪という同じ字面をてがかりに「往事」を引き出すことを暗示しているのであろう。「擁缸」は、どうやら李清照の造語らしい。しかし、やはり唐の元稹の「寒」に「雪を擁す深き竹闌」の句に続いて「またこのほとぎに満ちたるさけに、ただ嗟す誰と歎びをともにせん」と歌うところからみれば、擁の字には、「往事」と違つたいまの孤独をひきだす鍵の役目も与えてあるのであろう。

つねにおもふ 海棠の咲きたる後は

「つねにおもふ」長記といえは、記憶のいい読者は、「ずっとおぼえています 溪のバンガローの日ぐれ」常記溪亭日暮、にはじまる本稿(二)の「如夢令」、また「きその夜 雨そぼろ風はやかき」昨夜雨疎風驟、にはじまる(三)の「如夢令(続)」を思い起こしてください。そうしてあのふたつが、李清照の結婚の前後に生れた熱い愛の詞であろうというわたしの推測をも、それならばこの「常記」にはさきの「長記」が響き、作者もまた当然あのふたつの如夢令を、つねに思っておればこそ、そのときとは違つたものとなってゆく「海棠の咲きたる後」がつねに、

春を傷む時なることを

と、あらたに心に刻みこまれる消息は、おのずからうなづけよう。以上前段。

酒尽き 歌やみ ほとぎむなしく

闌、とは頂点を過ぎた状態を指す。頂点への過程はゆるやかだが、過ぎるとたちまち終点に達する。酒闌とは酒興が頂点を過ぎることで、宴会でならば人が立ちはじめ、いっぺんにわびしくなってしまうあの状態をいう。

「酒尽き」と訳するゆえんである。ここのをそのような宴の後とみてよいが、あるいは人生そのものを宴と見立てているのかも知れぬ。「ほとぎ」尊、は酒をいれた樽。玉は飾り言葉。「ほとぎに満ちた酒」にさえ飲びをともしうる人のいないことを嘆かねばならないのに、そのほとぎさえ空になって、

青きともしび　てりかけり

缸、は缸、燈と通じ、ともしび。「青きともしび」青缸とは、灯心が燃えかたまって花のようになり、それを缸花とも丁字がしらともいい、丁字がしらができると光りがくらく青味をおびる。その青味を帯びた灯火をさしというのである。李賀の「十二月樂辭・十月」に「缸花夜笑つて幽明を凝らす」というのを、ほとんどそのまま言い換えたのが「青缸暗明滅」である。「十月」は「珠帷に怨み臥して眠りをなさず」の句がしめすように、独り寝の女の哀しみを歌う。

魂あくがれてさぶしきに

もまた「十月」の女の悲しみとほとんど一体となっていて、たえがたいのに、

さらに一声　ほととぎす

ほととぎすの声のかなしきについては、その例がやまほどある。ただ駄は、ホトトギスではない別の鳥だとする弁があり、ただしよいようだが、日本語訳詩としては「ほととぎす」とするほうが適当だろう。

「私たちは、易ということばかり何を思うだろうか。それは人智の進まない中国古代の迷信で、科学の進んだ現代社会に生きるわれわれにとつては、無用の長物にすぎないと一蹴することもできよう。あるいは、大道易者がもっともらしく筮竹をあやつって、善男善女をたぶらかす占いでしかないと無視することもできる。実際、むかしの西洋にもアジアにも占いはあったし、またいまの日本にもさまざまな占いがあって流行っている。」

著者は、われわれの目の前に現れている「易」の姿から「はなし」にはいり、その姿に馴れた目からは奇異と考える他の一面を説き、やがて、不易にして流行する易の本質を示唆する。

今日、われわれはなぜ易を問題とするのか。

人は人の類として存在するけれども、また個別に一人として生きる。すべては変転の相の中に在るけれども、個別者としての人は具体的な事に直面し、個々の状況の中で自己の決断を迫られる。あらかじめ行動の基準として確固たる信念をもっていれば、何もためらうことはないし、うろたえることもない。それですめばそれでいいわけで、敢えてそのようにすましておくということもできる。しかし事の多様性は無限であり、人にとってはいつも新しい出会いとなる。人が生れて年をとるということは昔からそうであったし、自分もそうであると思つても、その変化を己れに体認する者だけが、それを新しい出会いとすることができ。日に新たな一刻に直面して迫られる決断の重みを担いつつ、事を自分に引き受け、かくて事態を新たに展開させるところに、易の問題があらわれてくる。」

そうして、

（易に思いをこらすことを自らに求める者にしか、易はその姿をあらわさない。）

そのような易の姿をみた人として、一七世紀の王船山を紹介する。

（王船山は明末清初の艱難に際し、己れの生涯の転機を決疑を占筮の神告に問い、自らの出処進退を定めた。のみならず、王船山の生涯そのものが易の教えに従い一貫の道を求め続けた点で、易の理を実践したということが出来る。）

易に問うにはどうすればよいのか。

（まず占うことは神告に委ねざるをえない大事であること、次に軽々しく直ちに易に問うことをせず、自ら繰り返して思慮を尽くし、さらに周りの人に尋ねても決することができないときに至って、はじめて神告に質すのである。問うべきことはすでに自分がその渦中に在るのであるから、状況は自分の知悉することであり、にもかかわらず神告に求めざるをえない大疑が己れの中にたたえられているから占うのである。かくて、示された神告の意味を自分の事象において了解し、敬虔の心をもって神告を全面的に受け入れることができるのである。）

易の占い方には複雑な本筮法のほかに種々の略法があるが、すべて王船山のとらないところであるのは、（神告をきくためには、このような長い手続きが必要）だからである。

ほぼ以上の序論の後、易の構造の々と、その具体的な問い方が、王船山の易論に従って述べられる。著者のもつとも勉めたところであろう。読者にとつても忍耐と努力が求められる。

（君子と小人という別を立てるのは、始めに両者の典型を設け、それによって人を区別するのではない。君子は自ら強めて息まらずといい、君子は自ら喻り、自ら修めるといふのは、そのようにせざるをえない衝動を自らもつからである。他者に依存するのが、小人である。他者とは、世間の習慣や他の人がみなそうするからという判断放棄をさすだけでなく、歴史の法則とか必然性とか、天地の理とか絶対的真理とかいう普遍性を立てることをいう。たとい正しいものであつても、それを他在的に倫常として立てれば、それは人を強い己れの貞とならない点で、やはり流俗である。）

著者はこのような「君子」を西欧の思想家のあいだにも求め、カール・グスタフ・ユングの次の言葉を共感をもって引いている。

『易経』は、証明や結果まで添えて示さない。それは自らを誘ふこともしないが、決して近づき易いものではない。それは自然の一部であるかのように、自分が発見されるまで静かに待っている。それは自己を知ること愛し、知恵を知ること愛する人びとにとっては、まことにふさわしい書物である。それを喜ばない人はそれを用いるに及ばないし、それに反対する人はそれを真理だと認めなければならぬ義務はないのである。

精神的なもの、生命的なものに対する洞察は、大地の法則に従うときのみ自由となる。大地に根を下した中国的思考は、われわれ西洋人にとって全く縁遠いものであることの自覚が、まず必要なのである。

東洋人ではあつても、君子でないわたしには、易は、近付きがたく入り難い境域だが、畏敬遠望したい。



1.38. わたしは想い起こす、よき青年たちよ、無量無辺の広大なカルバの過去の時、不可思議で推察も測定もできない彼方、さらに遠い以前の時のこと、「日月燈明」という名の如來・尊敬されるべき・正しい覺りをえたひとが、世に現れた。学と行とを完成し、スガタであり、世間を知り、無上の方で、人類の調御者、天と人との教師で、仏であり、世尊であった。かれは法を説き、初め善く、中間善く、終わり善く、すぐれた目標をもち、表現ゆたかで、純一・円満・清淨・潔白な梵行を明らかにした。すなわち声聞たちのためには、四つの真理を明らかにし、縁起に現われる法を説いた。それは生・老・病・死・憂・悲・苦・惱・不安をのりこえ、ニルヴァーナに帰結するためである。またボサツ大士たちのためには、六つのパーラミターをともなった最上の正しい覺りにはじまり一切知者の知にいたるまでの法を説いた。

anusmarāny ahaṃ kulaputrā atite' dhvany asaṃkhyeyaiḥ kalpair asaṃkhyeyatarair vipulair acinty-  
air aparimitair apramānais tataḥ pareṇa paratarāṃ yadāsīt tena kāleṇa tena samayena candrasūr-  
yapradīpo nāma tathāgato' rhan samyaksaṃbuddho loka udapādi vidyā-carana-saṃpannaḥ sugato loka-  
vid anuttarāḥ puruṣa-damya-sārathīḥ śāstā devānāṃ ca manusyaṅgāṃ ca buddho bhagavān / sa dharmaṃ  
deśayati samādaḥ kalyāṇaṃ madhye kalyāṇaṃ paryavasāne kalyāṇaṃ svarthaṃ suvyañjanaṃ kevalaṃ pa-  
ripurṅgaṃ parīśuddhaṃ paryavadaṭam brahmaçaryaṃ saṃprakāśayati sma / yad uta śrāvakaṅgāṃ catur-

āryasatya-saṃprayuktam pratītyasamutpāda-pravṛttam dharmaṃ deśayati sma jāti-jarā-vyādhī-mar-  
ga-śoka-parideva-duḥkha-daurmanasyopāśānaṃ samatikramāya nirvāpa-paryavasānaṃ /bodhisattva-  
nāṃ ca mahāsattvānaṃ ca satpāramitā-pratītyasamutkām anuttarāṃ samyakṣaṇbodhim ārabhya sarvajña-  
jñāna-paryavasānaṃ dharmaṃ deśayati sma //

文殊少年が語る前世の記憶の続きである。

「想い起こす」anusmarāny は「記憶する」Smr. にanuが接頭語としてついた変化形で、直訳すれば「記憶に従う」である。よき青年は、よい家柄の男子の意で、上位のカーストに属する青年を指したが、釈尊はこうした言葉はすべて、世俗の習慣的用法を洗い清めて使用した。すなわちカーストにかかわりなく、真実を求めるよき青年、というほどの意味である。「善男」と漢訳するのはまったくふさわしい。

妙本が「過去無量無辺不可思議阿僧祇劫」正本が「往古無央數劫不可思議無能度量時」と訳する部分は、梵本から直訳すると「無量無辺の広大なカルバの過去の時、不可思議で推察も測定もできない彼方、さらに遠い以前の時」となる。カルバは劫と音写され、インドの時間単位のうちの最長のものを指し、無限の時間と考えてよいものである。無限といえそれが最大最長と考えていた少年のわたしには、妙本の訳でさえ、屋上屋を架するものと煩わしかった。しかし、数学や論理学を学ぶと、無限にも大小幾通りもあることがわかり、「無限の時間」の彼方、というものが荒唐無稽でないことが推察された。今日の宇宙物理学という無限と『法華経』のいう無限とが同じであるかどうかは知らないが、時間や空間についても、常識が及ばぬ広大な視野を『法華経』の世界が

展開していることは疑うべくもない。妙本が、そのような、測定しえない数 *numbers* を、音写した「阿僧祇」という訳語にしているのは見事と言う他はない。ここでのわたしは、なるべく無骨な直訳を採用したいのだが、時として妙本の簡浄に従うこともあろう。

「日月燈明」は梵文通りならば、月と日の燈明であり、月と日を燈明とする、というほどの意であろう。「如来・尊敬されるべき・正しい覺りをえた人」を妙本は「如来・応供・正遍知」と訳し、如来・阿羅漢・正等覺者というのと同じ。これにつき玉城康四郎氏は原始經典の次の句を引いて説明する（研究一〇）。

如来・阿羅漢・正等覺者は、まだ起っていない道を起さしめるものであり、まだ生じていない道を生ぜしめるものであり、まだ語られていない道を語るものであり、道の知者であり、道の明者であり、道の熟知者である。

「応供・正遍知」に続き、妙本は「明行足・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・仏・世尊」と訳する。合わせて「如来の十号」といい、しばしば經典に見える。玉城氏はやはり原始經典の『沙門果經』から次の句を引き、如来の能力を枚挙し、それを尊称とすることは、大乘教団に始まるのではないことを、示す。

如来は世に現れ、阿羅漢であり、正等覺者であり、明行足であり、善逝であり、世間解であり、無上士であり、調御丈夫であり、天人師であり、仏であり、世尊である。如来は、天・魔・梵・沙門・バラモン・天人と共なる人々の、この世界を、みずから証知し、作証して、説いている。如来は、初めも善く、中間も善く、終りも善く、道理もあり、語句もあるダンマ（法）を教示し、完全に充足し、かつ清浄なる梵行を明らかに

している。

氏は、これと『法華経』のこの部分とを対比し、次のように言う。

原始經典も『法華経』も、如来の十号を通して、如来の超越性・絶対性を、それぞれの言語形態において表明しようとしたものであることは明らかであるといわねばならない。大乘經典としての『法華経』が如来の超越性・絶対性を述べていることはいうまでもないとして、実は原始經典もまた、その本質においてまったく同一であることが知られるであろう。

「初め善く、中間善く、終り善く」も決まり文句だが、簡潔をこのむ漢訳が「初善中善後善」と省略しないのは、その重要性を心得ていたからだろう。ではその重要性とはなんだろう。おそらく精神の進展の順序次第を重んじる考え方がそこに反映していることであろう。インド人は非歴史的だといわれる。たしかにインドそのもののいわゆる歴史でさえ、中国やギリシャの歴史記録と対比することによって辛うじて推定されるに至ったことから知られるように、インド人は外面的なことがらは記録しなかった。しかし内面的な精神の進展への関心は決しておろそかではなかった。むしろその微細なところにまで注意を払い、記録した。仏教經典に繰り返しが多いのは他にも理由はあるが、心の動きを省略せずに言葉にしようとしたのがその重なるものである。仏教以前のヴェーダやブラーフマナにも繰り返しの多い処からみれば、それがインド人の思惟方式なのだ。「歴史」という記述を、中国人やギリシャ人の方式にかぎらないとすれば、ブラーフマナや仏教經典も、人間の精神の歴史といえるのではないか。話しが横道にいきすぎた。元へもどろう。

「四つの真理」とは、四諦あるいは四聖諦といわれ、人生問題とその解決法についての四つの真理。①苦諦。この世は苦である、すなわち思いのままにならないという真実。②集諦。苦の原因が煩惱であるという真実。③滅諦。煩惱を断ち無常の世を超えることが苦の滅したさとの境地であるという真実。④道諦。さとの境地に至るためには八正道という正しい修行方法によるべきであるという真実。八正道とは ①正見。②正思惟。③正語。④正業（正しい行為）。⑤正命（正しい生活）。⑥正精進。⑦正念。⑧正定（正しい精神統一）。

「縁起」とは、他との関係が縁となって生起する意。すべての現象は無数の原因や条件が相互に関係しあつて成立し、その条件や原因がなくなれば結果もおのずから無くなるという、仏教の基本的教説。その縁起の理法を十二の項目にわけたものが「十二因縁」で、無明（無知）、行（潜在的形成力）、識（識別作用）、名色（名称と形態）、六処（眼・耳・鼻・舌・身・意）、触（感官と対象との接触）、受（感受作用）、愛（盲目的衝動）、取（執着）、有（生存）、生（生起）、老死（無常なすがた）をさし、順次にまえのものが後のものを成立させる条件となり、順次に前の物が滅すると後のものも滅する。そのすべてが滅した状態を、ニルヴァーナ（涅槃）といい、そこにはもはや生・老・病・死にともなう憂・悲・苦・惱・不安はないとされる。

ところで「声聞たちのためには、四つの真理を明らかにし、縁起に現われる法を説いた。それは生・老・病・死・憂・悲・苦・惱・不安をのりこえ、ニルヴァーナに帰結するためである」のところは、すべての梵本と正本がほぼこれに対応するのに、妙本だけは「為求声聞者。説応四諦法。度生老死。究竟涅槃。為求辟支仏者。説応十二因縁法」とする。「声聞のさとりを求める者のためには、それにふさわしい四諦の法を説いて、生・老・死

などから救いだし、ニルヴァーナを完成させ、プラティエーカブツダ（独覺、辟支仏）のさとりを求める者のためには、それにふさわしい十二因縁の法を説く」という意である。他の本が「声聞のために説いた」とする法門を、声聞と辟支仏に分け、それぞれに配当したことになる。妙本の拠ったテキストがそうなっていたとも考えられないではないが、後の「化城喻品」でも、他の本が「四つの真理を詳しく説く、すべての存在は縁によって生起すると」とあるのを妙本が「為宣：四諦十二縁」と訳するところから推せば、クマラージヴァが、その透徹した大乘思想と『法華経』理解にもとづいて、敷演訳したもの、と見てよいのではないか。

「パーラミター」とは、向うへ渡った、完全な、というほどの意。「波羅蜜」と音写し、「度」「到彼岸」と意識する。覺りの道、ボサツの修行をさし、六つのパーラミター、六波羅蜜、とは ①布施。財を与え、法を教え、安心を与える。②持戒。戒律を守る。③忍辱。迫害困苦に耐える。④精進。努力を継続する。⑤禪定。心を集中する。⑥智慧。迷いを放れ、実相を覺る。この⑥を般若波羅蜜ともいい、これをさらに方便、願、力、智の四つにひらいて、十波羅蜜とよぶこともある。

「最上の正しい覺り」は、妙本では、その梵語を音写して「阿耨多羅三藐三菩提」とする。これは日本語となり和歌にも使われた。「一切知者」は、すべてを知るひとで、如来や仏を指す。

1-39. さらにまた、よき青年たちよ、日月燈明如来、尊敬されるべき、正しい覺りをえたひとから、後から後へ、やはり日月燈明という名の如来、尊敬されるべき、正しい覺りをえたひとたちが世に現れた。このようにアジタよ、次つぎに日月燈明という名をもつ如来、尊敬されるべき、正しい覺りをえたひとたちが、同じ

名、同じ家系・氏族、すなわちおなじくバラドヴァーージャ氏族の二万の如来がいた。そうしてアジタよ、それら二万の如来の、最初の如来から最後の如来まで、やはり日月燈明という名の如来、尊敬されるべき、正しい覺りをえたひとであり、學と行とを完成し、スガタであり、世間を知り、無上の方で、人類の調御者、天と人との教師、仏であり、世尊であつた。そのひとりびとりが法を説いた。初め善く、中間善く、終り善く、すぐれた目標をもち、表現ゆたかで、純一・円満・清淨・潔白な梵行を明らかにした。すなわち声聞たちのためには、四つの真理を明らかにし、緣起に現われる法を説いた。それは生・老・病・死・憂・悲・苦・惱・不安をのりこえ、ニルヴァーナに帰結するためである。またボサツ大士たちのためには、六つのパーラミターをともなつた最上の正しい覺りにはじまり一切知者の知にいたるまでの法を説いた。

tasya khalu punaḥ kulaputrās candrasūryapradīpasya tathāgatasya rhatāḥ saṃyaksambuddhasya pareṇa paratarāṃ candrasūryapradīpa eva nāmnā tathāgato rhan saṃyaksambuddho loka udapādi / iti hy ajitaitena paraparo dāhāreṇa candrasūryapradīpa nāmākānāṃ tathāgatānāṃ arhatāṃ saṃyaksambud dhānāṃ eka nāmadheyaṇāṃ eka kula gotraṇāṃ yad idaṃ bhara dvāja sagotraṇāṃ viṃśati tathāgata sahasraṇy abhūvan / tatrājīta tesāṃ viṃśati tathāgata sahasraṇāṃ pūrvakāṃ tathāgatam upādāya jāvat paścimakas tathāgataḥ so pi candrasūryapradīpa nāmadheya eva tathāgato bhūḍ arhan saṃyak sambuddho vidyā carana saḥpannāḥ sugato lokavid anuttaraḥ puruṣa dāmya saratīḥ śāstā devaṇāṃ ca manuṣyāṇāṃ ca buddho bhagavān / so pi dharmāṃ deśitavān ādau kalyāṇāṃ madhye kalyāṇa parya-

vasāne kaljāṇaṃ svarthaṃ suvyañjanaṃ kevalaṃ paripūrṇaṃ pariśuddhaṃ paryavadātaṃ brahmacariya  
sāmprakāśitavān / yad uta śrāvakāṅgāṃ catvāryasatyā-samyuktāṃ pratityasamutpāda-pravṛttaṃ dharm-  
aṃ deśitavān jāti-jarā-vyādhi-maraṇa-śoka-parideva-duḥkha-daurmanasyopāśānāṃ samatikramāya  
nirvāna-paryavasānaṃ / bodhisattvānāṃ ca mahāsattvānāṃ satpāramitā-pratisamyuktāṃ anuttarāṃ  
samyaksambodhiṃ ārabhya sarvajñāṇāna-paryavasānaṃ dharmāṃ deśitavān //

「日月燈明」という名の二万の如来が次つぎに世に現われるというのは奇妙だが、ウバサルハという名のバラモンがグリドラクータ山で一万四千回葬られた話しが『南伝大藏經』にあることを、本稿5「鷲の峰」で紹介した。何度も葬ることは、何度も世に出ることを暗示する。

「バラドヴァージャ」という仏弟子についても本稿1「悪ピク」で述べた。そうして、マガダ、コーサラの両国にはバラドヴァージャ姓のバラモンが多く、そのまた多くが釈尊の弟子となったことも。

日月燈明如来が、バラドヴァージャ姓とはいっても、『法華經』ではそれがバラモンだとは言ぬ。また仏弟子のバラドヴァージャと日月燈明如来とを直接結び付ける説明はない。しかし南伝の經典『アッガンニャ・スッタ』で、釈尊が、バラモン出身の弟子ヴァーセッタとバラドヴァージャに、カーストの無意味であること、法こそ人類の最上のものであること、法の人格化した如来に対する信の堅固さこそ貴賤を定める基準であることを教え、あわせて世界の起原や日月の出現を語り、「世尊の真正なる子、法の後継者」となれ、というところからすれば、バラドヴァージャが、やがて『法華經』で日月燈明とされても、不自然ではないだろう。